

影絵芝居の小屋では、演目の『霸王別姫』がまさにたけなわだった。光と影が流れ動き、絶えず喝采があがる。雪瑛はうっとりとし見入りながらまわりにつられて拍手していたが、隣の致庸は芝居には上の空で、熱い思いをこめてじつと雪瑛を見つめていた。雪瑛が楽しんでる様を見ていると、とても満ち足りた気分なのだ。

陸続と芝居小屋に人が入ってくる。山西総督の哈芬が勅命大臣と内閣学士と督察山西学政を

兼ねる胡沅浦たちにつき添ってゆつくりした足取りで入ってきた。一行は役人風を吹かしてあつという間に前の方の席を確保したが、たまたまそれは致庸と雪瑛の目の前だった。

『霸王別姫』の上演は佳境に入っていたが、胡沅浦と哈芬はちらりと目を向けただけで私語を始めた。哈芬が拱手して言った。

「胡大人、このたびお上が胡大人ご自身を山西に学政の視察に派遣なさったのは、わたくし不遜ながらそのお心を察しますところ、きつと山西でその政治手腕を存分に發揮してくれるであろうとご期待なさったのことでございましょう」

胡沅浦は髭をひねってうなずいた。

「大人のおっしゃる通りです。いまわが大清国は内憂外患を抱え、まさに天下存亡の時、お上はご心労のあまりお食事の味もわからず夜も眠れぬ状態でいらつしやいます。聖朝には中興が必要ですが、そのためにはまず人を用いることです。むろん一人で国を興せるものではありませんが、しかし有能な人材がおれば、国家の難事も自ずと解決の糸口がつかましましょう」

哈芬はそれに賛同するどころか冷ややかに笑った。胡沅浦がいぶかしげに見やると、哈芬はため息をついた。

「大人はご存知ありますまいが、残念ながらここ山西では民間の気風が昔とは違います。さきの明朝の時代に山西商人が興ってより、どうもよくない風習が根付いてしまっています。読書人を敬わず、官途につくことすらありません。こんな俗謡すらあるのですよ。――

「一番の秀才は商人になる、二番の秀才は宮仕え。商売繁盛錢儲け、知府になるとてお断り。」このような土地柄でどんな人材が得られますやら？」

かれらの声は益々大きくなっていく。雪瑛は明らかに迷惑がって思わず致庸を見た。致庸も機嫌を損ねると、胡沅浦のところに行つて軽く肩を叩いて拱手した。

「もし、旦那様方、話があるなら外でなさってください。芝居を観ている人の邪魔になりますから！」

哈芬はむっとしたが、胡沅浦がそつとその手を押さえ、振り返つて言った。

「申し訳ない、ではもう黙りましょう」

致庸は笑顔でうなずくと座席に戻つた。

幕間の休憩の時間に、致庸が雪瑛の好物の落花生を買つてやろうと立ち上がると、ちようど胡沅浦と哈芬も外に出ようとしていた。一行が外に出ぬうちに陸玉菡とその父親の陸大可が入つて来るのに出くわした。小柄でまるまるとした陸大可は目敏く哈芬に気づくと、玉菡に向かつて囁いた。

「玉児、ご覧、あれが山西総督の哈芬大人だよ！」

声を潜めてはいたが少なからぬ人の耳に入り、低いざわめきが広がった。秀才のような中年男がため息まじりに言った。

「こちらが哈大人とすると、そばにいるお方はきつと勅命大臣——お上が重用なさつておいでの文武両道の胡沅浦大人だろうな。あの方は山西督察学政の内閣大学士だ、言うならばわれわれの運命は全てあの方の手に握られているようなものだな」

致庸はどきりとして立ち止まり、哈芬と胡沅浦が出ていくのを目で追つた。雪瑛も聞こえており近寄つてきて小声で囁いた。